

秘めたる蕾、啄むモノは……。

咲き急ぐ蕾 後篇 澤村明日香視点 体験版

くく登場人物くく

沢森 明日香 鬼瓦校に通っている。三組。昭利の幼馴染。昭利に好意を抱いており、最近積極的になり始めている。しかし、昭利がまだ初心なせいでうまくいかず、それが不満。

中村 昭利 鬼瓦校に通っている。三組。サッカークラブに所属している。最近、スタメンになった。明日香とは幼い頃からの付き合い。最近積極的になった彼女に好意を抱くようになってい
るが、今一つ、積極的になれない。

坂田 広樹 鬼瓦校に通っている。三組。昭利の友人で、明日香に好意を抱いていた。

笠原 雄太 鬼瓦校に通っている。三組。昭利の友人で、スケベ。

志垣 隆 鬼瓦校の教員。三組の担任。比較的若い教員。昔は彼女が居た。

井沢 元治 鬼瓦校の養護教諭。臨時で配属された。職務経験は浅いが熱心。

2. 理科室

※前編にて昭利が理科室を出て行った後の理科室の様子です……。

昭利を追って聡志まで行ってしまい、残った明日香と雄太はまだ空白残るノートをどう埋めたものかと悩んでいた。

時間も時間なのでこのままさぼって帰ってしまおうとも思ったが、そうすると無理やりつき合わせた昭利に悪い。だが、雄太と一緒に居ても何も楽しくない。

笠原雄太はチビでスケベなところがあがり、なれなれしく「明日香ちゃん」と言い寄って来るので苦手。昭利の友達なので会話もするけれど、彼が居なければ興味も無い。

「実験どうする？」

「さあ？ あたし達も先生のところ行ってわけ話して今日は帰ろうかしら」
今も二人きりでも特にこれといった会話も事務的なものだけだ。

「あと一つじゃん。すぐ終わるよ」

「どうやって？」

ポットの中には30度のお湯があるだけ、実験が指定する温度は35度。5度違う。それも徐々に冷めてしまうことを考えれば、どんどん遠ざかっていく……。

「だからさ、35度にすればいいじゃん」

「だから、どうやって？」

ばかばかしいと思いつつ、雄太を見る。彼はピーカーを抱えると左右に振りだした。

「何してるの？」

「こうやれば温度が上がるかなって思ってる」

「なんで？」

「電子レンジみたいなもんだよ。分子がぶつかることによって温度が上がるんだ」

「へえ……」

電子レンジの理屈をよく知らない明日香だが、彼の動作に電子レンジの1000分の1の効果ですらあると思えない。

無駄なことをしていると思いつつ、それでも課題をこなそうとしている分だけ怠ける自分よりマシなのかもしれない。だが努力の方向が明後日の方を向いている。

「そんなことしても無駄でしょ。馬鹿ね」

「何もしないよりいいじゃん」

いつになく真面目な雄太に明日香も後ろめたさが募り、せめて前を向こうと座り直す。

「回して温度が上がるねえ……。ちよつと貸してみなさいよ」

半信半疑というか明らかに疑っている明日香。温かいココアを飲むときなどくるくる回した方がすぐに冷めるのもあり、むしろ逆効果だとすら思えた。

それでも試しにやってみようと、ビーカーを受け取り揺らしてみる。中の水がくるくる渦を作るも、それ以外の変化は見られない。

「……やっぱ無駄じゃない？」

「そんなことないよ。もっと早くやるんだよ」

「あ、ちよつと、やめてよ……」

不満を漏らすと雄太はムキになったのか、ビーカーを取り上げようとする。中には水が入っているの、それを無理に掴み合えば当然……。

「きゃー！」

「わあ！」

渦まいていた水はビーカーから飛び出ると二人にびしゃびしゃとふりかかる。

「んもう……」

服にスカートに思い切りかかってしまい、明日香はむつとしながら雄太を見る。

「ごめんごめん。っていうか、明日香ちゃんが無理に掴むから悪いんだぞ」

「あんたが離せばよかつたんでしょ？ あーあ、服濡れちゃった。どうしてくれんのよ」

「乾かせばいいじゃん」

「脱げって言うの？ やらしい」

むつとしながら雄太を見るが、彼は堂々と上着を脱いでシャツ姿になっていた。そのまま彼は服を水で濡らします。

「何してるの？」

「なになって、これ食塩水だからそのままにしていると色とか落ちるよ」

「え……」

今日の実験内容を思い出し、慌ててパーカーを見る。お気に入りのロゴの丁度色の濃いところが濡れており、もしこのまま色が落ちたら……。

「どうしょ」

「脱いで洗った方がよいよ」

「だって、やだよ」

「なんで？ シャツ着てるのなら平気だよ。俺しかいないし」

「それが嫌なのよ。だってあんた、スケベじゃん」

「そりゃ俺はスケベだけど、明日香ちゃんみたいな貧相な体型なんて興味ないよ。一組の佐々木さんとか二組の今野さんならともかくさ」

「な！ 誰が貧相な体型よ！ これでも最近は……」

「最近は何？ どうかしたっけ？ 別に何も変わらないじゃん。ああ、気にしてるんだね。ごめんごめん。でお、俺、貧相なカラダな明日香ちゃんの裸なんて全然興味ないし」

雄太はへらへら笑いながら服を水で洗い、絞っていた。明日香も早くしないと服の色が落ちてしまう。今日はパーカーの下にスポーツブラをしていた。地味な柄だけれどおっぱいのラインがわかるようにデザインされており、それが少しエッチな気がする。

それを雄太ごときに見せなければならぬのかと思うと嫌だけれど、一方で貧相な体型と言われたままなのも癪だ。

最近では相応に大きくなってきているし、それを雄太がちらちら見ていたのも知っている。それがこの期に及んで貧相な体型と言われるのが悔しい。

「ふーん、じゃあ、貧相な体型程度、見ないでよね」

どうせ欲望に負けて盗み見るだろう。そうしたら彼を糾弾してやる。そうすれば昭利から余計なのを引き剥がせる。そうすれば昭利と二人切りになれるチャンスが増える……。

そう連想した明日香は服の色落ちも心配なので早速パーカーを脱ぐ。

「んしょと……」

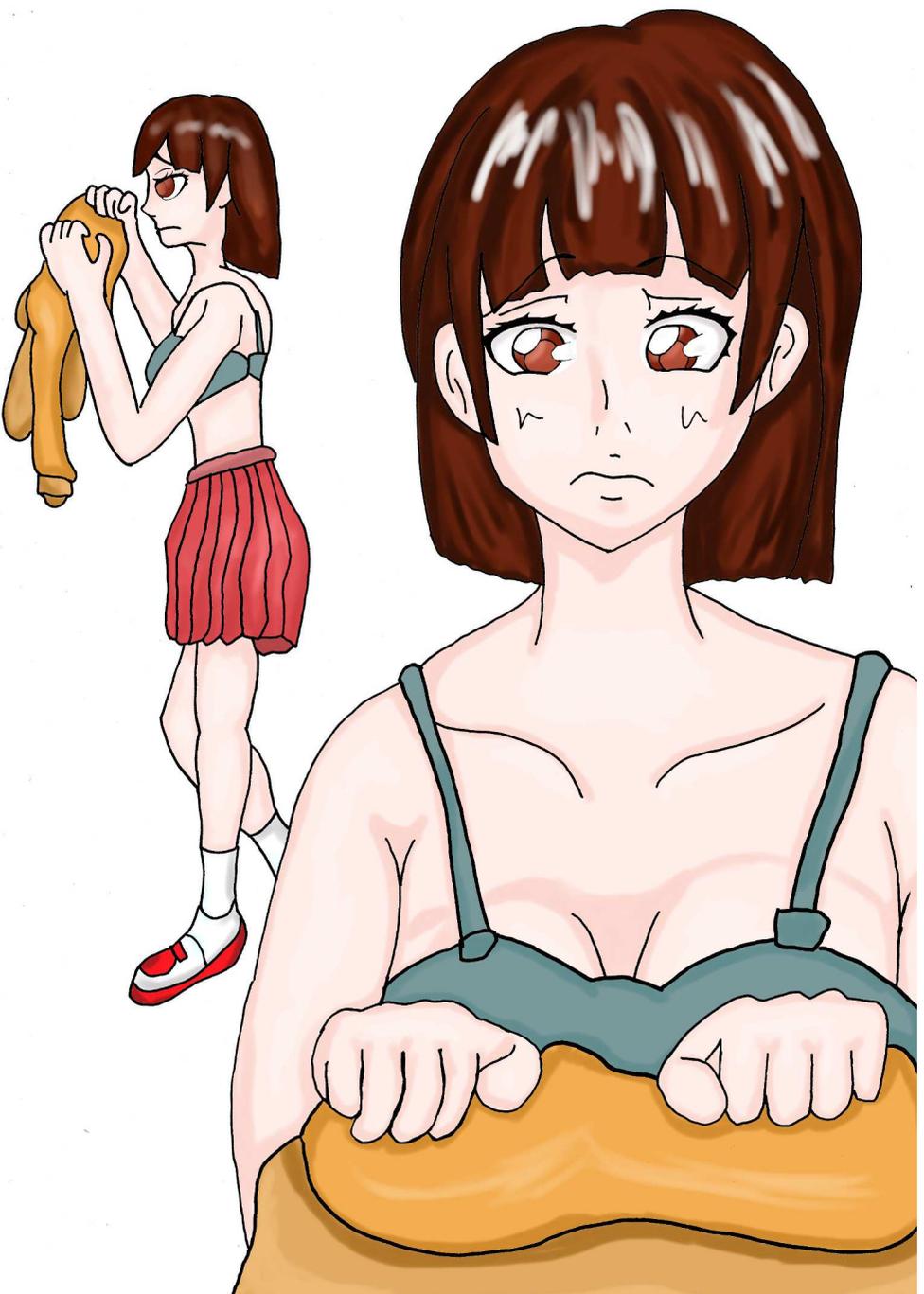
ショートカットの髪をかきあげ、腕を軽く回す。スポーツブラに締め付けられたおっぱいは軽く上下する程度に動いただろう。となれば、きつと雄太は……。

「ちくしよう、おちねえな……」

意外にも雄太は服を洗うほうに集中していた。

「くっ……」

どうせやせ我慢と思い、明日香は挑発を兼ねて彼の隣の蛇口でパーカーを洗い始めた。



「んしよ、んしよと……」

「軽く水で塩を落す程度でいいよね」

「そうなの？ ふーん」

ひとまず濡らしてから絞ってみる。けれどパーカーは厚くて絞りにくい。

「俺がこつち持つてるよ」

「そう、お願い」

片方を雄太にもたせてぎゅつと絞り、窓際に掛けておいた。

「さてと、じゃあどうしようかしら」

なんとなく身体が熱い。やはり下着姿で男子の前に居るのは恥ずかしい。そう思うとどんどん身体が熱くなる。

「うーん、水もこぼれちゃったし……」

せつかくの30度の水もこぼれてしまい、水道水も冷たいまま。どんどん実験から遠ざかっていくことに徒労感だけが残る。

「そうだ……思ってたんだけどさ、人の体温って37度ぐらいあるよね？」

「だろうけど、それがどうかしたの？」

「だからさ、それなら肌で温めればいいんじゃないかな」

「は？」

「ほら、お酒とかで人肌とかあるじゃん。それだよ。人肌で温めればいいんだよ」

どこから湧いてくるのか謎なアイデアに明日香は呆れてしまう。それでも先ほどの無駄にくる回すよりは意味があるかもしれない。

「あのねえ……」

疑問を呈する明日香だが、雄太はビーカーに水を500㏄汲むと、それを抱きしめる。

「うおお、熱くなれ〜」

「なにやっつてんだか……」

どんな意味があるのかとにかく気合でごまかそうとする雄太は、力み過ぎて顔を真っ赤にしている。それも、ものの五分もせずにはあはあ息を荒げ、額を拭う。

「よし、少しは温まったはずだ」

根拠の薄い雄太の言葉に明日香は頬杖つきながら冷めた半眼を向ける。

雄太は温度計を取ると、それをビーカーに入れ、拌み始める。

「どうか温度があがってますように……」

「そんなすぐあがるわけないじゃん」

「やってみなけりゃわかんないじゃん」

「そりゃ、人の体温で温めてればそこそこ温度も上がるだろうけどさ、そんな急に……」

「お！」

雄太は温度計を取り出し、メモリを見て大声を上げた。

「見てよ、ほら、温度上がってるって」

温度をよく見ようと彼は指で温度計を何度も擦り、自信満々に明日香に見せた。

「なに言ってるのよ……」

温度計はすでに30度近くまで上がっていた。

「うそ、そんなに早くあがるの？」

「人間の体温って36度以上でしょ？ 30度ぐらいならすぐだよ」

「うーん」

まさかの温度上昇に明日香は唖ってしまう。いくらなんでもあり得ないと思いつつ、それでも結果を否定する要素が見つからない。

「ほら、明日香ちゃんもやってみてよ」

「あたしも？」

「うん。二人でやれば二倍じゃん。ほら、はやく」

「……わかったわよ……」

30度の温度計を見せられた手前、ただ否定するわけにもいかず、明日香は言われた通りにビールカーに5000水を汲み、抱っこする。

お腹に冷たい感触がし、少し濡れる。

グレーのスポーツブラが濡れると色が濃くなり、肌にピタリとはりついてくる。

「うーん……」

その感触が嫌であり強くお腹に押し付けたくなかった。

「あがれあがれ〜」

なおも無駄に叫ぶ雄太をよそに、明日香は半信半疑のままビールカーを抱いていた。

「どう？ そっちのほう……」

「そんなすぐ変わるわけではないじゃん」

「そうなの？ 明日香ちゃん、身体冷たいんじゃない」

「なんか失礼ね」

「それに、ちゃんと持ってないじゃん。だめだよ、ちゃんと身体で覆うようにしないと」

「え……ちよっと」

雄太は明日香の後ろに回るとお腹の辺りに手を回す。急なことに明日香はよけようとするが、水がこぼれることが頭にあってそれができなかった。

「こっやっつてさ、もっと身体に密着させないと」

ビールカーを明日香の胸元に押し付け、手でおさえる雄太。明日香は胸元近くを触られそうなことに焦りと恥かしさで真っ赤になる。

「ちよ、なにするのよ、スケベ！ 離れなさいよ」

「だめだよ。こっししないと温まらない」

「ちゃんと自分でやるから」

「そんなこと言って、さっきから明日香ちゃん、さぼってばっかじゃん」

「何言ってるのよ、あんたこそさぼってるじゃない」



「じゃあ、俺のも一緒にやればいいや」

雄太は自分の持っていたビーカーを明日香のビーカーに移し入れる。

「ちよ、なんで！ 何の為に二つでやってたと思ってるのよ」

「俺だけ頑張ってもしようがないじゃん。それに二人でやれば温度も二倍になるよ」

「なるわけないでしょ！ 二人でくっついたら60度になるの？ バカじゃないの」

背後から腕を回す雄太に明日香はキークー喚く。けれど、水が倍になってさらにこぼれやすくなった。もし身体にかかったら、ブラジャーが濡れてしまうため身動きが取れない。

「明日香ちゃん、なんか身体が温かいじゃん」

「それはあんたが変なことするから恥ずかしくて……」

「恥ずかしいの？ 何が？」

「何がって、だから、ビーカーが当たってるでしょ……胸に……」

「明日香ちゃんのおっぱいに当たってたんだ。小さいから気付かなかった」

「は！？ 小さい？ これでも大きくなってるのよ」

「そう？ わかんないなあ……」

雄太は首を傾げ、ビーカーを左右に揺さぶる。

「うるさいなあ、あたしのだって大きくなってるの。っていうか、今付けてるのがスポーツブラだから締め付けられてるだけだってば」

「ふーん、じゃあ、本当は大きいの？」

「そりゃ、おっきい子と比べるとまだまだけど、でも、結構大きくなったもん……」
恥かしさと悔しさから小声になる明日香。育ち盛りのおっぱいはビーカーの冷たさを挟み、冷えてしまう。

「ふーん。本当かな」

「本当よ」

「じゃあさ、触ってみていい？」

「え？」

唐突な提案に明日香は裏返った声で聞き返す。

「だ、誰が触らせるもんですか！ ふざけないですよ。もう離れてよ！ 暑苦しい」

「暑苦しい？」

「そうよ。暑苦しい……って、ちよつとなんでくつついてくるのよ」

「暑苦しくしないと意味ないじゃん。温めてるんだよ？ ほら、明日香ちゃんもくつついて」

「いやよ、なんでアタシがあんたなんかと……ちよ……あ……」

その時、明日香の胸に雄太の手が触れた。

スポーツブラの中で押しつぶされているおっぱい雄太の手が圧力をかける。それがビーカーをゆらそうと左右に揺れるものだから、おっぱいにも微弱な振動が伝わって来る。

「ちよ、やめてよ、触らないでっば……」

スポーツブラ越しに触れたことで明日香は恥かしさを感じ、耳まで真っ赤にさせて口を尖らせる。だが、雄太はそんな明日香など気にせず、今度は直に触ってきた。

「ちよ……んう、やめてっば……あん」

「明日香ちゃん、耳まで真っ赤だね。それに身体も熱いよ」

「それは、あんたが人のおっぱい触るからでしょ。スケベ、やめてよね」

「だめだめ。明日香ちゃんが熱くなったんだし、今がビーカーを温めるチャンスじゃん」

「あのねえ、そんなこと……んっ……んっ……ああん」

嫌がる明日香に構わず雄太は彼女のおっぱいを弄り始める。

おっぱいの形を確かめるように撫でまわし、たまに指をおしあて、感触を確かめる。

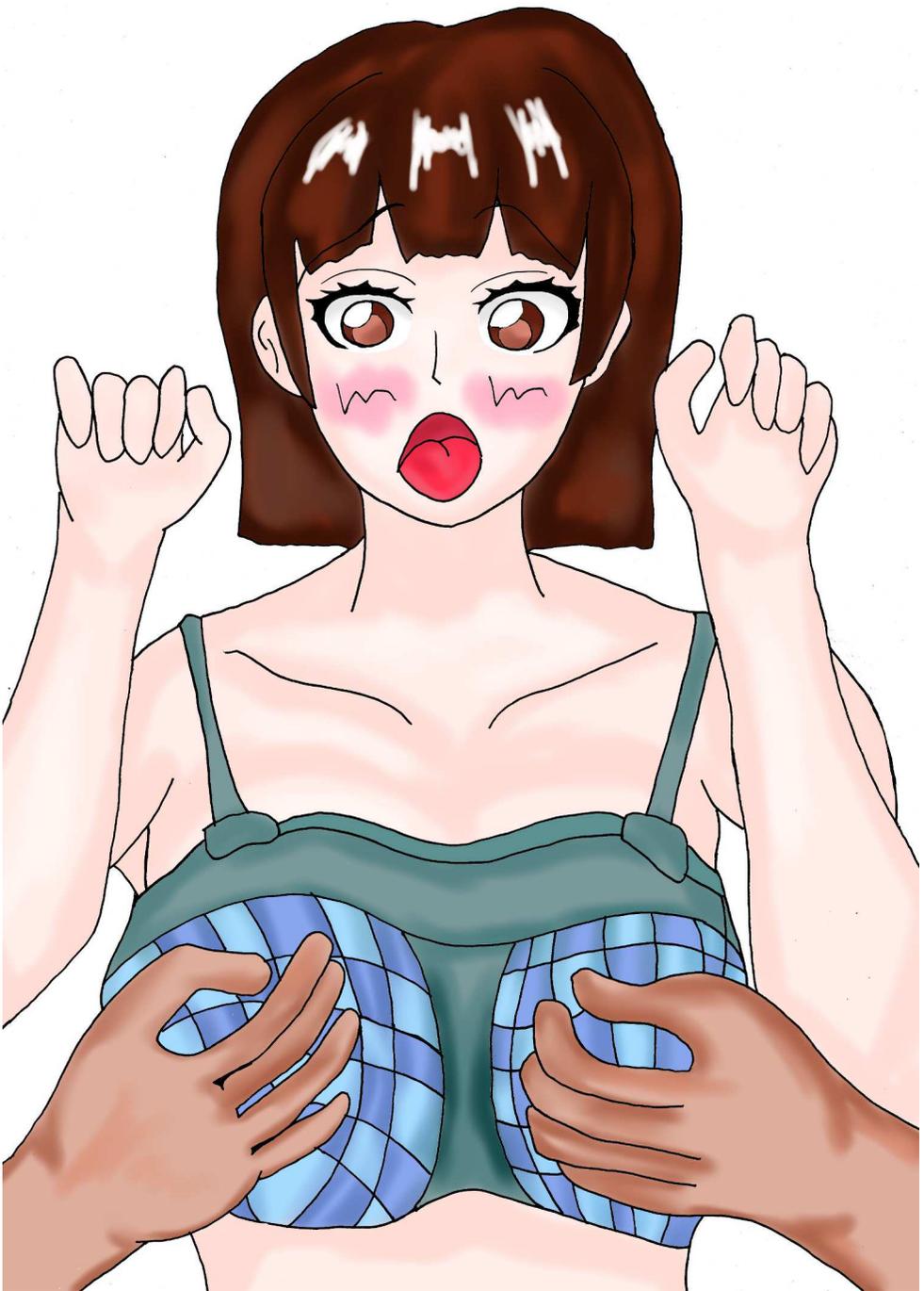
明日香はくすぐったさとおっぱいを触られている事実に恥かしさを覚えてしまう。

身体が自然と丸くなり、抵抗したいのにそれができない。自分はそのままで臆病だったのかと驚いてしまう。一方で、雄太の指先がちゃんと立った部分に触れると、肩から全身にかけてぶるぶると震えてしまう。

「んっ……あ……」

「っ触ると明日香ちゃん、びくびくするね」

雄太はスポーツブラの突起部分を指摘するように人差し指をあてがい、くるくると円を描くように摩る。



「ちよ、やめ……んっ……」

「ここ乳首？　ここ触ると明日香ちゃん、変な声出してちよーうけるんだけど」
「うるさいなあ……なんか、くすぐったいから……」

「それだけ？」

「そうよ。だからやめなさいよ」

「くすぐったいだけなら、触っても平気だよね……」

「ちよ……んっ……ああん……んっ……」

雄太は楽しそうに明日香の乳首をさすさすくすぐる。

時折掴まれ、指を沈ませ弄ばれると、明日香の声はどんどん高く抑えられなくなる。

「やあん……ちよっつと、そんない……んっ、そんなとこ、さわらないで……やだ……んっ……
しないで……」

「いいじゃん、くすぐりたいぐらい我慢してよ……っっていうか、明日香ちゃん、かなり温かくなってる？　これならすぐに35度になるって。もう少しの辛抱だよ」

「ほんと……んっ……ああん……はあはあ……ほんとに終わり？」

「だから、もう少し恥ずかしくなって身体熱くしてよ」

「そんなこと言われても……」

「ねえ、明日香ちゃん、本当におっぱい大きくなったの？」

「なによ、急に……」

「だっけさっきさ、大きくなったって言ってたけど、本当かなって思っ……」

「本当だっけ……」

「じゃ、これめくってみるね」

「え……あ、やだっけ……や……あ……」

雄太はビーカーを床におくと強引に明日香のスポーツブラをまくり上げる。

ぷるんと顔を出したおっぱいは握りこぶしよりも大きく丸く、つんと上を向こうと精いっぱい強がっていた。

その頭には肌色よりピンク色に近い乳輪が見え、桜の蕾のような丸く可愛らしい乳首がぷくつと立っていた。

「へえ、結構大きいね。白鳥屋のお饅頭ぐらいあるよ」

雄太はすかさずおっぱいを両手で触ると、汗ばんでしっとりした感触を楽しむ。

「な、いきなり……なに……んふう……ん……やん！ あ、乳首触らないでよ……ヘンタイ……んっ……んふう……」

おっぱいを下から揉みほぐし、乳輪周りをさすりさすり丁寧に円を描くように摩る。乳首を親指の腹でちよんと押し、中指と人差し指で包むようにつまむ。それを前後左右にゆっくり撫でまわすと、明日香は何度も肩を震わせていた。

「触った感じも柔らかくって饅頭よりキモチイイね。うわあ、俺ずっと触っていたい」
「んっ……や……はあん……はあはあ……はあくくん……んっ……はあ……」



乳首を執拗に責められると、自然と明日香は言葉少なくなり俯いてしまう。

どんどん身体が熱くなる。恥かしさとは別に何か知らない感情が彼女を昂らせていた。

「はぁん……んっ……んう……ぁん、あっ……ぁぁん……」

「明日香ちゃん、さっきから変な声出してどうしたの？ もしかして感じてんの？」

耳元で作り笑いをしながら囁く雄太だが、彼も余裕が無いらしく、声が上がったり変に途切れたりする。

「感じてなんか……ないもん……。あんたに触られたって気持ち悪いだけ。んっ！」

鼻息が耳から首筋へとかかり、それがゾゾッと嫌悪感を煽る。本当は振りほどいて逃げ出したのだが、乳首を擦られ、抓まれ、おかしい感覚が走ると身体が縮こまってしまう。

「んふう……んふう……はぁ……んふう……」

鼻で呼吸をむりやり整えようとするが、おっぱい周りを弄られる感覚が身体を熱くさせ、思考が惑う。

だんだんと身体から力が抜け、雄太に抱き寄せられることに抗うことができず。そのまま抱きかかえられると、彼の肩に頭を預けていた。

「やあだぁ……やめてえ……よお……。お願いだから……変なところ触らないで……」

「嫌なら振りほどけばいいじゃん」

「ちから……ちから、身体に力はいらないだもん……ねえ、ゆうた、おねがい……んっ……ぁぁん……」

「どこ触っちゃダメなの？ ねえ？ 俺、馬鹿だから言ってくれないとわかんねー」

「どこって、だから、お……お、おっぱ……い、だってばぁ！ んきやう！」

乳首をきゅっとなじまされた時、背中を反射的に丸めていた。その反動でびしゃっとビーカーの水がこぼれてしまう。

冷たい水はスカートにかかり、パンティにまで染みてしまう。

「あーあ、こぼしちゃった……。明日香ちゃん、下も脱いだ方が良さよ」

「……だって、これ……脱いだら……」

「しょうがないよ。さ……ほら」

「いや……やぁ……」

嫌がる明日香は四つん這いで逃げるけれど、火照った身体は力が入らずに手も膝も濡れた床で滑る。

「いたた……」

無様に前のめりに突っ伏す明日香のお尻は雄太に見せつけるように上がっていた。

「……」

「きゃっ！ やだ、もう触らないですよ……」

目の前のお尻を前に我慢できなかった雄太は手を伸ばし、丸くなり始めたお尻を布越しに弄る。プリーツスカートはひらひらして動きやすいけれど見えてしまいそうなデザイン。その分だけ隙間も多く、ぐいと引き上げればストライプのパンティがちらりと見える。

「明日香ちゃん、カワイイパンティだね」

「うるさいなあ……いいでしょ……」

「二組の百合子とか綾子って大人っぽいピンクとか黒のセクシーな下着つけてるってよ。明日香ちゃんは可愛いね」

「くぅ……」

気にしていることをちくちくと言われ、悔しさと恥かしさでさらに身体が熱くなる。歯を食いしばり、なんとか反撃をしてやろうと目論む。

「ひゃう！ ああん！」

けれどそんなことはお構いなしに雄太は明日香のスカートの留め具に手を回し、ぱちりと外し、下腹部に触れた。

雄太のかさかさした手が触れ、撫でまわすとくすぐったさで背中がぞぞっとなる。

そしてパンティ越しに当てられる固さを保ったモノ。弾力もあわせもっており、押し付けられ、お尻の割れ目にそって熱と硬さを伝えてくる。

「やめてよ……なに？ 変なものこすりつけないで……」

振り返り彼を見る。蹴飛ばそうにもスカートからパンティが見えてしまいそうどううまくできない。それどころか変に動いたせいで、固いモノがお尻にぐいぐい当たってしまう。

「ん……んっ……ん、ああん……」

お尻に当てられた固いものが前後すると、心なしか身体がふわっとする。そのまま浮遊感に流されそうなところでモノが退き、落下するように身体が重くなる。

「ひいん」

またもこすりつけられ、身体が浮かび、またどさっと重くなる。

「んひ、あひいん……あはあん……」

その都度変な声が漏れ、明日香は目を瞑って恥かしさに耐える。

「明日香ちゃんのお尻におれのチンポ当たると、なんかすごいびんびんになっちゃう」

「おちんちんって……そんな汚いものつけないでよ！」

「だって、すごい気持ちいいんだもん。やめられないじゃん」

「ううん！ ああん……んっ、だめ、おねがい……やめ……んっ！ おちんちん、おしりにつけないで……おねが……いいー！ あん！」

身体が浮く感覚にお腹の奥が熱くなるのが追加される。パンティの奥が熱くなり、べとつとした感覚が滲み始め、かゆみに似た疼きが起きる。

「ん……ああん……はあん……はあはあ……やめ……んっ……ああん」

ちゅぷ、ねちゅ……ぷちゅ……くちゅ……ぬちゅ……。ぬちゅっ、ぬちゅっ……。

「ん、なんか……チンポが濡れてきてるよ……それに……」

「やだ、まさかおしっこしてんじゃないでしょうね……いやよ、そんなの……」

「違うよ。でも、明日香ちゃんのパンツだって濡れてるよ。おもらししてるみたい……」



「え……うそ……あ……え……なんで……」

明日香はまさかと思いき股間に手を差し入れると、確かに濡れていた。ビーカーの水かと信じて臭いを嗅ぐと、おしつこと生臭さの混ざった臭いがした。そして粘り気がある。

「やだ、なんで……んっ……はぁ……なんでなの……」

「明日香ちゃんさ、エッチな気分になってるでしょ？」

「なって……んっ……ないもん」

「嘘だ。だって、これってさ……」

「ひゃん！ や、パンツの中あ〜」

雄太は丸いお尻にぴったり食い込むパンツのクロッチをずらし、まだ薄い毛で隠せないぬらぬらした割れ目を指で撫でた。

彼の指にはねっとりとした粘液がこびりつき、ぴちゃっとな音を立てて弾けた。

「んああく〜ん……はあん……はぁ……」

「保健でならわなかった？ エッチなこと考えたり感じたりするとエッチしやすくなるようにこういう粘液が出るって……」

「あたし、エッチな気分なんて……はううう〜……」

しゃべっている最中に割れ目をなぞられ、明日香は歯を食いしばる。身体が浮いてそのままどうにもなくなってしまいそうなのを我慢するためだった。

「んう……はあ……はあ……なにこれ……うそお……」

けれど浮ついた声が漏れる。

呼吸をついた時、明日香は身体に快感が芽生えていたことを誤魔化せなかった。

たまに一輪車に乗っている時に感じた高揚感。それを楽しむために何かと練習をしていたけれど、それをより強くしたモノを感じていた。

すぐく気持ちが良い。このままぐりぐり弄られたい。もっと触って欲しい。奥が熱くなるし、疼く。もっと強い刺激で……。

「……おーい、沢森く、笠原く」

そこへ聞こえた隆の声。二人は瞬間的に我に返り、あたふたしだす。

「ど、どうしよ！ 服着ないと！」

明日香はズボンとスカートを手にするが、慌ててそれどころではない。それは雄太も同じらしく、手間取っていた。

「おっかしいな……どこいったんだ……」

もうそこまで来ていることに二人は慌てふためく。なんとか誤魔化そうと四つん這いのまま理科準備室へと向かう。

「……あ……」

その時、椅子に明日香のパンティが引っかかってしまう。

「どうしよ、これ……」

慌てていることと暗がりになり始めたことで手元がおぼつかない。

「急げ、そんなの脱いじゃって！」

「だって！」

「この格好で見つかるよりいいよ。ほら、早く」

雄太に引っ張られ、パンティが脱げてしまう。

「……沢森く？ 笠原く？」

それを取ろうとしたけれど隆の声が聞こえてくる。明日香はひとまずパンティを見捨てて急いだ。

教室の戸が開かれた時、間一髪で準備室に逃げ込んでいた。

※ 続きは製品版でお楽しみください……。

3. 公民館

日曜の昼下がり、明日香は公民館へ向かって歩いていった。

ボランティアはこれまででも何度か参加してきた。世話する立場と世話される立場の両方を経験していたからお手の物だ。

昭利と一緒に参加だと思おうと頬が緩んでしまう。

「明日香ちゃん、何かいいことあったの？」

最悪だった。曲り角の向こうから雄太と広樹がやってきたのだ。

「別に？」

浮ついた顔を見られたことと、この前の理科室でのことを思うと雄太の顔など見たくない。けれど、変に避けては弱みを握られたようで悔しい。

強気にいよう。負けないように、いつものように、これ以上、調子づかせないようにする必要がある。

「そっか、今日って公民館のボランティアの日か。沢森さん、頑張ってるね」

広樹は思い出したように言うと、笑顔で会釈して通り過ぎようとしていた。

「ふーん。そうなんだ。じゃあさ広樹、俺らも手伝おうぜ」

「は？」

「手伝うの？ 僕は暇だけど……」

「ちよつと、今更何を言ってるのよ。なんであんなんかがボランティアしたいのよ。お金でないのよ？」

「そりゃボランティアだもん。金もらえないよ。でもさ、ボランティアすると内心良くなるんですよ？ そういうのって進学とか就職に有利になるじゃん、俺も今から参加したいな」

「下心丸見え。さいてー」

「いいじゃん。な、広樹も行こうよ」

「いいけど、沢森さん、大丈夫？」

広樹も一緒ならまだなんとかなるかもしれない。面倒なら雄太を広樹にまかせっきりにするればよい。それに、ここで逃げる選択をしては、また二人きりになった時、雄太を調子づかせることになる。

「いいわ。けど、邪魔をしたらすぐ帰ってもらおうからね」

「うん。頑張るよ」

広樹は笑顔で頷くと、雄太に続いた。

「前に進んで、そしたら後ろに漕ぐの。」「輪車は急に止まれないからね」

公民館で昭利と一緒に活動するつもりだったが、なぜか雄太への「輪車の指導をする明日香。彼が危なっかしいことと、飛び入りボランティアの二人をベテランである明日香と昭利の補佐として参加させるよう、隆が提案したためだ。」

本当は広樹が相手のほうが良かったのだが、彼の場合、明日香を避ける雰囲気があり、不適合と思われたらしい。

「自転車に乗るような感じでやればいいわよ」

腰に手を当て一歩離れてぶつきらぼうに言い放つ明日香。彼女は教えるつもりが無い。

「うおっと、上手くいかないや」

雄太は一輪車に跨るもすぐに滑り、へらへら笑っていた。

乗れるようになりたい気持ちが無塵も感じられないところを見ると、別の目的が伺える。

「こ最近、雄太は「先生に言いつけられた」、先生に運んでって頼まれた」、委員会の仕事で残って欲しい」などといい、明日香と二人きりになろうとしていたからだ。

二人きりになったらこの前の性的なはずらのことを蒸し返してくる。そうされない為にもできるだけ他の人を巻き添えにすることで躲していた。

公民館へ来れば参加者が居るので何もできないだろうとたかをくくっていた。けれど、なぜか二人を残して皆遠巻きになっている。

雄太があまりにも転ぶため、それを見られるのが恥ずかしいからだ。

本来教えるはずの参加者達は隆に連れられて広場をくるくる回っていた。

「ね、明日香ちゃん、肩貸してよ」

「嫌」

「なんで？」

「嫌なものは嫌」

「ふーん……」

明日香の明確な拒絶を前に、雄太は余裕の表情で彼女に近づき、肩を掴む。

「やめてよ、離して。大声出すわよ……！」

手を振り払おうとする明日香だが、それより早く雄太は明日香の胸に手を伸ばしていた。

「ちよ……んっ……」

スポーツブラで締め付けられたおっぱいを服越しに触ってくる雄太。明日香は驚きと恥かしさ、怒りを感じつつ、そこに少しの別の感覚を抱いていた。

「大声出すんじゃないの？」

雄太は明日香の胸を円を描くようにまさぐり、乳首の位置を親指で探り当てる。

「ん……ふっ……はあ……さわらないで……よ……んっ！」

雄太がさわさわしていると、親指が明日香の胸の少し固い部分に当たった。その瞬間、彼女の口から短い高い声上がる。

「あっー」

物陰に居るおかげで誰に見られることも無い。けれど、不審に思われたら誰か来るかもしれないと、慌てて口をおさえる。

「こ。明日香ちゃんの敏感な場所じゃん？ そうでしょ？」

「ちが……んっ……ふう……や……さわらないで……そこ……あはっ……ん」

乳首を探り当てるなり雄太は人差し指と親指で挟み、くいくい揺さぶる。

今日は昭利と二人で居るつもりだった。だからブラジャーもスポーツブラのような締め付けるものではなく可愛らしいものになっている。そのせいで雄太の指先から乳首を庇うものが少ない。ふにゃふにゃな乳首も乳房を弄られ、つままれていたせいも、ぷくつと勃起してしまう。そうなるさらにつまみやすくなり、雄太を調子に乗らせていた。

「ひひ、明日香ちゃん、だいぶ感じやすいじゃん。もしかしてオナニーとかしてんの？」

「おな……、おなにい？ 知らない、そんなの……」

「オナニーってさ、自分で触ってエッチな気持ちになることだよ。ねえ、どうなの？」

「しらないってば……それより、誰か来たらどうすんの。止めてってば！」

「その時にやめりや大丈夫じゃん？」

雄太は一輪車から降りると、明日香を壁におしやり、両手でおっぱいを揉み始めた。

「んっ……やめてって言うてるでしょ……ほんと、大声だすわよ……」

「出せる？ 昭利が来ちゃうかもよ？ おっぱい触られてること見られちゃうかもね。そしてこの前のこととかも教えちゃうかも」

「な……」

「明日香ちゃんがロッカーの中で俺のチンポ股に挟んであんん言ってたってさ……」

「卑怯よ……、狡い」

明日香の知られたくない秘密、知られたくない相手をピンポイントで突かれ、一気に氣勢が削がれた。

「それにさ、おマンコ」

「!？」

耳元で女性器を囁かれ、真っ赤になる明日香。その反応を見ながら雄太は続ける。

「俺が指入れてぐりぐりしたら明日香ちゃん、すっげー良さそうだったじゃん？ 違う？」

「ちがう……違うもん……」

「そう？ だって、なんか肩震わせて愛液だらだらマンコから垂らしてイッてたじゃん？」

「いってたって……あたし、別にどこも……」

「違って、すごく気持ちよくなったでしょ？ そういうのイクって言うんだよ」

「イク……って、ウン……あたし、きもちよくなんか……」

「うそだよ。明日香ちゃん、イッてたじゃん？」

「ちが、……ちがう」

今更否定したところで雄太には見抜かれている。

あの時、雄太に股間を指でぐりぐり弄られ、どんどん気持ちよくなっていた。

はしたない声を上げながらお尻を彼の指の方へと向け、もっとしてと求めていた。

あの時の気持ちよさが忘れられず、一方で雄太のことを思い出したくないので自分で触れることはしなかった。そのせいでここしばらく悶々とした日々が続き、体育の時など、自然と男子の股間を見ていた。

「またしたくなつたんじゃない？」

「誰が……。ふざけるんなら、あたし帰るからね」

被りを振り、雄太から離れようとする。けれど、雄太は彼女の背後から忍び寄り、今度はお尻を擦る。

「あはあん……」

お尻の筋に添って掠るように触れてくる。さわくつと触れられた明日香は拒むつもりなのか内股になり、壁際に逃げる。

「雄太も逃がすまいと首筋に唇をつけ、べろりと涎まみれの舌で舐め始める。

「や……ひいう……んっ！」

肩を疎める明日香。背中に悪寒が走るけれど、気持ちとは裏腹に股間が湿っぽい。今日のは昭利に見られてもいいような女の子らしい下着。それが徐々に濃い色に染められる。

「下手に動く返って目立つよ？ それとも知られたいとか？」

「ふざけないで……。あたしはあんたなんか……」

「そうはいつでも、さっきから明日香ちゃん、かなり感じてるじゃん。俺驚いたよ。まさかここまで感じちゃうなんてさ……。すっごいエッチじゃん」

「誰がエッチよ、……。んっ……はあ……はあ……や、なめないで……。んっ……やだあ……」

首をべろおりと舐めながら乳首を揉む雄太。一応、一輪車の特訓中という名目であり、脇にそれらしく置いて行為を隠すカモフラージュにしている。

「んっ……はあ……はあ……お願い、やめて」

いつもならひっぱたいてでも抵抗するけれど、背後からしがみ付かれて振りほどけない。

おっぱいを触られて力が入らないというのもあるけれど、その気になった男には力で適わないと思ひ知らされた。

「どうしよっかな、じゃあさ、俺が満足できたらいいよ？」

「満足って、この前みたいに？」

ロッカーで雄太のチンポを弄った時。そんなつもりは無かったけれど、ぐりぐりいじっていたら、白い粘液がたつくさん出た……。

あれをまたしろということに、明日香は頭がくらくらとした。

「そうしたらいいよ。そうだね。じゃあ、俺が帰ってもいいよ」

「だがそんな事……。バカなこと……言わないで」

「じゃあ、このままおっぱい揉ませてね」

むにゅむにゅと揉みしだく雄太。明日香の乳房は良い感じにほぐれ、熱を持ち、意思と裏腹にじんじんと快感を産み落とす。

「やあああん……だめえ……そんなにしないでえ……やだ、んっ！ ああん……」
「ねえ、どうする？ 俺はこのままでもいいけどさ……」

耳元で囁かれ、あのぞくぞくとした感覚が身体に走る。それがただの嫌悪感だけではないと、徐々に明日香も気付き始めていた。

「……こんなところじゃ……。お願い、もつと人目につかないようなところで……」
せめてもの抵抗として、隠れられる場所を求めめる明日香。

「ふーん。そう。じゃあさ、倉庫に行こうよ」

雄太はにやりと笑うと、その提案を受け入れる。

「うん……」

明日香はこくりと頷くと、彼を押し返そうとする手から力を抜いた。

*
*

倉庫へ戻る明日香と雄太。

彼女をエスコートする雄太の手はお尻の辺りを弄り、ときおり、敏感な部分をちよんと触る。

「んっ……やめてっば……」

人の目が無いとはいえ、いつだれが来るかわからない。明日香は足早に倉庫へ入った。

「えへへ、緊張するなあ……」

扉の外に人が居ないことを確認してから軽く閉める。完全に閉めては鍵を掛けられかねないし、言い訳がしにくいので明かりが入る程度にしておいた。

「……」

明日香は衣服を整え、雄太を横目で見る。

短パンの前がこんもりと盛り上がっており、デニムの青が少し濃くにじんでいた。

「じゃあさ、お願いするよ」

ずいっと前に出て、膨らみ具合を見せつける雄太。明日香はおずおずと手をさしだすと、こんもりした部分をまさぐり始めた。

「お……ああ、明日香ちゃんが俺のチンポ触ってる……、うわあ、ヘンタイじゃん」

「なによ、あんたがしろって言ったんじゃない……。さつさと出して終わらせてよ……」

この前は直に触ってぐいぐい左右に揺らしていたら白いのが出た。今度は服の上からだか、とにかくいじれば良いのだと思い、ぐりぐりする。

「ん……あは、やべ、興奮する。明日香ちゃんが俺のチンポ弄ってるんだもんなあ」

にやにやしながら言う雄太。その表情には余裕があり、チンポも前のようなオーバーなリアクションが無い。

「ん、ちよつと、早く終わってよ……」

文句言いながらも抑え込まれた気持ちには逆らうことを想定させず、ただ雄太のチンポを弄ることに専念させられる。

しみ出してくる粘液。濃くなるデニムの青。ぬちゅっと音がして、手に生臭さがこびりつく。「んっ、やだ、臭い……」

顔を顰め、雄太を睨む。けれど彼はそれを許したりはしない。

「早くしたら？ それとも触りたい？ やっぱ明日香ちゃんはスケベな変態女じゃん」

「だれが変態よ……こんなの触りたいわけないじゃない……」

涙目になりつつ、それでも必死にチンポを弄る。

くちゅねちゅ……ぷちゅ……ちゅ。

湿り気が増し、手がぬるぬるしだす。

いったいなんの液体なのだろう。わからない。とにかくいやらしい匂いがしてしまう。それが手につき、また汚されてしまうような気持ちになる。

——大丈夫だもん。あそこさえ守ればいいんだもん。エッチされたことにならないんだもん。半端な知識で自分を守り、なんとか終わらせようと懸命にチンポを擦る明日香。だが、いっこうに暴発の様子も無い。しびれを切らしたのか、雄太はズボンのベルトを外し、下げた。

「ちよっと、あんた何考えてるのよ……」

「だって、全然気持ちよくなれないんだもん。直接触ってよ。ほら……」

ブリーフのテント部分もやっぱり滲んでいた。糸を引く粘液。生臭さとおしっここの匂いに頭がくらくらする。気持ち悪いのか、だんだん胸が熱くなる。

それでもなぜかチンポから目を離せない。

「ほら、早く……」

「い、いや……」

拒みつつも震えた右手が前に出る。これを弄って白いのを出させれば終わりのはず……。そう思いつつ手を差し出す……。

「おーい、沢森さん！」

「！」

外から聞こえる隆の声。雄太は慌ててズボンを穿きなおす。

「先生！ どうかしましたかー」

理科室の時と違って隠れてやり過ぎせそうになるので、雄太は倉庫を探られる前に自分から顔を出した。

「なんだ、倉庫に居たのか？ 姿が見えないからどこに行ったのか探してたんだぞ。ほら、中村達がなんかするみたいだから、手伝ってあげなさい」

「はーい」

雄太は返事をすると思日香の肩を掴む。

「触らないで……」

「そう言うなよ。今は大人しくしておいた方がいいと思うぜ。変な素振りすると疑われるだけだもん。それとも明日香ちゃんはエッチなことしてたの、皆に知られたい？」

明日香が言えないのの良い事に雄太は彼女に寄り添いながら広場に戻る。

「おーい、先生、明日香―」

ぼんやりしていた明日香の耳だけれど、彼の声だけは特別はつきりと聞こえた。

「なんだよ、昭利の野郎、邪魔しやがって……」

雄太は舌打ちしつつ、明日香を解放する。

「……んっ……はあ……」

去り際にお尻をくぼみに添って触られてしまい、布地が粘液を通じてアソコを刺激し、甘い声が漏れてしまった……。

※ 続きは製品版でお楽しみください……。

4. イタズラ

「おーい、明日香」

広場に戻ると焦ったような昭利が声をかけて来た。

嬉しいはずが、今は見られたくない。

きつと顔が赤くなって、股からエッチな臭いがしてそうだから。

「……ああ、昭利、どうかしたの？」

「どうかしたのじゃねーよ。なにさぼってるんだよ」

「ごめん」

「まあいいや。それよりなんかリレーとかしようと思うんだ」

「そう、じゃあ俺と明日香ちゃんで二輪車片付けてくるから。その間に内容を決めてよ」

「そんなの一人で行けよ。ほら、明日香、行くぞ」

昭利は俯く明日香の腕を取り引っ張った。

「ちよつと昭利……あ」

ふらつく明日香はそのまま昭利にもたれかかる格好になる。

「お、おい、明日香？」

昭利は慌てて支えようとしてくれたのだけれど、その手が触れた先は明日香のおっぱい。

エッチな気持ちで興奮していたおっぱいは偶然の接触にふわつとした快感を遠慮なく甘受する。

「……んっ！ あ！ え……あ」

乳首も擦れた。股の奥がキュンとしてジュンとする。

「大丈夫か？ どっか悪いのか？」

心配してくれる昭利の声。本当はそのまま彼を頼りたい。けれど、エッチなことをされたことなど知られたくない。

「……疲れたから、待って……て」

「風邪でも引いたのなら医務室で休んでろよ」

昭利が心配そうにのぞき込んでくる。

見られてしまった。エッチな気持ちな自分の顔。きつと赤くて、何かに期待しているはしたない顔を見られた……。

「大丈夫だから……うん。大丈夫……」

「なあ、大丈夫か？ほんと無理するなよな」

強い口調で肩を掴む昭利。大好きな彼の顔が近くに迫り、手の温かさを伝えられた。

「ひん！」

ぼんやりする快感が明確になり、幸せな気持ちに包まれたと思うと、それが悲鳴になって外に出た。

「お、おい、俺そんなに強くしたつもりは……」

明日香は必死になって被りを振ると、心を落ち着かせようと深呼吸をする。

「ずう〜はあ……はあ……」

そして顔を一度叩くと立ち上がった。

「よし、大丈夫。さ、いこつか」

「え。ああ」

訝しむ昭利を後目に、明日香は広場へと向かってずんずんと歩いて行った。

*
*

広場では昭利達がリレーの内容を話していた。

まだ身体にまどろみの残る明日香は少し離れたところで呼吸を整えようと立ち尽くしていた。

「……明日香は……」

気が付くと昭利が居た。彼は心配そうに顔を覗き込んでくる。

顔の紅潮は収まっていたけれど、汗ばんだ肌はそのままだ。いつもより股間を内股にさせてもぞもぞしているのも不自然かもしれない。けれど、そうしていないと股から滲んだエッチなお汁の匂いが昭利に嗅がれてしまいそうで恥ずかしい。

「大丈夫。何でもないから」

パーカーを短パンから出して股間を隠すように引っ張る。すると自然とおっぱいが強調されてしまう。

昭利が少し身を乗り出したように見えたので、明日香はなにかな？ と自分を顧みる。すると、パーカーに浮き出た膨らみに気付き、ようやく背を向けた。

昭利だって男の子。女の子のおっぱいが意識できると、やっぱり目で追ってしまっらしい。

それは誇らしくもあるが、今は雄太のスケベな気持ちを昭利も抱いていることに嫌悪感を覚えてしまう。

「それじゃあ、雄太と俺と広樹のチームで三つだな……」

「このおにいちちゃん、運動音痴だからやだー」

ようやく進展が見えたところで不平の声が出る。

「負けるのやだー」

さらに一輪車で雄太の運動音痴ぶりをみていた参加者達が文句を言います。

「うーん、なんか仕方ないな……。じゃあ、明日香の班ならどうだ？」

「いいよ」

「お姉ちゃん、一輪車得意だもんね」

「ねえ、その子が一輪車じゃ狡くない？ だって、皆に教えるぐらい巧いのよ？」
すると見慣れない女子が口を挟む。

明日香よりやや背の高い女子。彼女はどこか楽し気に明日香を見下ろす気配があった。

「そう？ 言われてみればそうかなあ。明日香、お前は悪いけど、「輪車じゃなく別のところ」で参加してくれよ」

「じゃあ、貴女は最期のムカデ競争ね。トンネル潜るの。いいでしょ？」

「いいけど」

「決まりね。この子がムカデで良かったわね」

笑顔で昭利に言う女子に昭利は首を傾げる。

「こいつ、猿みたいにすばしっこいし」

「誰が猿よ！」

「ほら、キーキー言ってる」

そんなものだろうかと特に気にしていない昭利だが、女は笑顔で続ける。

「あたしの次はこの子のパンツが見れるかもしれないし」

「な！」

「おい！」

彼女の言葉に昭利と明日香は真っ赤になる。

「へ、変なこと言うなよな。俺は別に……って、明日香、誤解だって、俺はそんなつもり！」

だが、昭利の真っ赤になった顔と、先ほどの胸元に視線を向けた前科がある。それに加えて女の子の胸元、お尻の丸み、少し位置を変えたら覗けそうな隙だらけの恰好。十分に男子の視線を誘うものだった。

「このスケベ……！ へんたーい……！」

悔しさと恥かしさで思わず昭利をひっぱたいていた……。

※ 続きは製品版でお楽しみください……。

6. 医務室

「んふう……………ふううん……………」

医務室のベッドに仰向けになった明日香は、枕を掴んで声を押し殺していた。

「なんか少し疲れたっぽくて、そんでちよつと休みたいっていうから……………」

「そうだったんだ。それは、ごくろうさま。事務の人を呼んで来ようか？」

「少し休んで様子見るって言ってましたし、それからでも平気ですよ」

ベッドの向こうでは隆と雄太が会話していた。彼はなんとか誤魔化そうと必死で大丈夫、大丈夫と繰り返し、ドンと胸を叩いていつになく任せろと強がった。

隆は明日香を軽く様子を伺っていた。表面上は特に外傷も無く、熱も無く、少し意識がぼんやりする程度で、意識朦朧という程でもない。熱中症というには時期がまだ早いので、軽い風邪だと言いつ張る雄太の言葉が通った。

「もし何かあったら教えてね。先生は事務室に居るし、病院に行くなら車を出すよ」

「はい、お願いします」

雄太は元氣よく返事をして隆を追い返すと、戸をしっかり閉め、鍵を掛ける。鍵といっても外側からワンアクションで開けられる簡易なもの。さらに窓のカーテンを閉め切り、ベッドの付属のカーテンも閉めた。

「はあ……………はあ……………んっ……………ふう……………」

枕を抱きしめながら喘ぐ明日香は、先ほどより顔を紅潮させていた。口を開けば粘つく唾液が糸を引く。

短パンは一部が湿っており、そこから酸っぱさと甘さを伴う臭いが漂う。

漂う香りが雄太の一度出したチンポをギンギンと元気にさせた。

「明日香ちゃん、もう我慢できないとか？」

「……………我慢ぐらい……………」

弱気になった明日香は枕で顔を隠しつつ、片目だけで雄太を見る。

隠す振りをして自分でおっぱいを触ったり、股座をぐいぐいしていたけれど、その刺激では

「イク」まで至らないらしく、悶々とした気持ちで顔に出ていた。

「あんたなんか……………あっち行ってよ。顔も見たくない」

弱気ながらに雄太を咎める明日香。けれどいつもの馬鹿にした態度の裏に甘える仕草が潜む。それが彼をどきりとさせ、同時にチンポの先っぽが冷たくさせた。

「明日香ちゃん……………ここ……………うずくんでしょ？ この前みたいに……………」

雄太の問いかけに明日香はコクンと頷く。

「そっか……………」

おもむろに手を伸ばし、おっぱいを弄る。

「ひゃあん！」

すっかり快感に絆されていた明日香の身体は、無造作な雄太の触り方ですら感じてしまう。

「んう……ああん……んう……はあん……もうやだあ……どうしたらおさまるの……」
自分の身体ながら、そのエッチな感情を処理できず、明日香は甘えた声をあげる。

「明日香ちゃん……ね、ズボン脱いでよ、俺、また明日香ちゃんの割れ目みたいよ」

「いやよ、えっち……」

「でも、このままじゃむらむらして酷いじゃん。俺がなんとかしてあげるって」
「ん……、なんであんななかに……」

「だって、このままじゃ昭利の元にもどれないじゃん。エッチな気持ちのまま昭利のところに行ったら嫌われるんじゃない？」

「……」

「あいつつてさ、まだ初心だし、もし明日香ちゃんがえっちな顔で行ったら、エラーって思うより、気持ち悪いって思われるんじゃないかね？ エッチな臭いするし……違う？」

「そんなこと……」

思わず自分の腕の匂いを嗅ぐ明日香。おそろおそろ指の匂いを嗅いだところで顔を顰めた。

「だけど、ここで一回スッキリすれば冷静になれるんじゃない？」

「……嘘つき。昭利は……、そんなことないもん」

安易な解決策にちらりと振り返る明日香。

「でも、今みたいに惨めに自分で股ぐらいじらなくて済むじゃん」

「だって……」

「いいじゃん、さつきもしたんだしさ。もう一回したからってかわんないよ？ 我慢したって

意味無いじゃん」

「……」

くすくす笑う雄太の言葉に反感を覚える明日香。その一方で、もうエッチをされてしまったと思うと、このやるせない疼きをついでに解消したい気持ちもある。

それに昭利だって綾子とエッチをして、白い雄汁をびゅっと出したのだろう。

自分には意地っ張りのくせに、おっぱいが大きくて積極的な女子相手にはそういうことをしてしまふ。そう思うと悔しくて悲しい。そう思うと、下腹部が疼き、切なくなる。

「わかったわよ……。その代り、絶対にナイショにしてよ……」

唇を尖らせつつも明日香は身を起こし、半立ちになるとデニムを下ろす。

今日のパンティは可愛らしくセクシーさに足りない。けれどクロッチ部分はねとっつ濡れてエッチな臭いを漂わせていた。

「うんうん、絶対にナイショにするし」

雄太はようやく素直になった明日香に満足そうに笑うと、彼女の股間に顔を近づける。一瞬間そうになりつつ、一旦落ちて着いてからもう一度顔を近づけた。

ぬとっつ糸を引きそうな粘液がパンティからしみ出している。その中心に筋が見える。

「ここが明日香ちゃんのおマンコ……すごく形いいよね。なんかエッチな臭いする……」

「……あたし、他の子と比べたことないからわかんないし……」

「明日香ちゃん、エッチじゃん。ああ、ここが明日香ちゃんのおマンコ……うわ、えっろ」
「いちいち言わないで、さっさと終わらせてよ……」

不機嫌を装うも悩まし気な声になってしまう。

もつとも、雄太も目の前の出来事に好奇心よりも気持ちが焦り、逆に息が苦しく戸惑う。

しばしの逡巡のあと、パンティに手を掛け、ぐいっと退きおろす。

その時、後ろの方でどしどしと音がした。

「……あ、まずい、昭利だ。どうしよ、隠れないと」

「え、だって、あたし、ズボン……」

「布団で隠そう。俺も布団の中に……」

雄太はベッドに乗ると布団を被り、そのまま明日香に股間に覆いかぶさる。

「ちよっと、変なところに隠れないですよ……」

言うが早いか戸が開けられ、昭利の声が室内に聞こえた。

「なんだよ、元氣じゃん……」

病室の戸を背負い、明日香はカーテンに隠れつつもどきまぎしていた。

昭利の性格からすれば無遠慮にずかずか入って来るだろう。そうなれば布団に隠れた雄太ともども、下半身まるだしの自分が見られてしまう。

「ちよっと待ちなさいよ」

それを例の女、綾子が止めた。

「なんだよ。まだ邪魔するののか？」

「そうじゃないわよ。っていうか、女の病室にずかずか入るなんてマナー違反よ。明日香さんの支度が終わるまで外で待つ。いいわね」

よくわからないけれど、昭利がいきなり入って来ることを阻止してくれたようだ。ほっと胸をなで下ろそうとしたところで、身体に快感が走る。

布団の下の雄太がもぞもぞ動き、明日香のぬれぬれのおマンコを舐めていたのだ。

「……うそ、そんなことしないでっば……」

小声で雄太を咎めるが、彼の舌が割れ目をなぞると指でされるよりずっとソフトな触れられ方で気持ちよい。粘液がじゅくくと奥から溢れると、雄太がそれをちゅちゅと啜る。

エッチなおつゆが雄太の吸われたことを感じ、明日香は先ほど感じた喪失感をもう一度抱いていた。

——またされちゃった……。あたしのエッチなところキスされちゃうし、飲んでるよね……。なんで雄太なんかにされなきゃならないの？

悔しさを含んだ徒労感に苛まれつつも股間は身体に快感信号を送る。気を抜いたらエッチな声をもらしてしまいそう。むしろ全てをぶっ壊しても良いから、我慢しないで快感に身を投げ出したい。そんな自暴自棄な気持ちを抱いていた。

「うるせえな。俺は明日香が心配で……」

「ごめん、だいじょうぶだから……」

それでも昭利には知られたくない。なるだけ冷静を装い、きっぱりと言い切る。

「え……」

「ちよつと汗かいてさ、拭いてたんだ。タオル借りて……。だから、ちよつとごめん……。ね……。少し休んだら戻るから……。んっ……。だから、ね」

「ああ、明日香がそう言うなら……」

その間も雄太は調子に乗ってマンコを舐める。

割れ目をなぞり、内側に忍ばせてくる。

きつと雄太の唾がマンコの中に入った。

少し前ならエッチなんておぼろげながらにしか興味がなく、せいぜいおっぱいを触ったり、おちんちんを触ったりするだけのことだったのに……。

そういう段階を飛ばしてマンコを舐められ、チンポを股に押し付けられた。

胸やお腹、股に出された精子。昭利ではなく雄太の精子。

あの日、塗られたくられた精子は家に帰った頃には乾いてぱりぱりと糊付けされたようだった。お風呂でこしこし洗うつもりだったけれど、青臭い臭いに毒され、せいぜいお湯でぬるぬるするのを落すにとどまった。

——雄太にされちゃった……。

明日香は、極力そのことを忘れよう、思いださないようにしようと思つたけれど、マンコを舐めさせ、エッチなおつゆを飲まれ、唾をねじ込まれて気持ちよくさせられたら抗えない。

「ありがと、昭利。んっ……と、あん……。のね？ ごめん……。ねっ、なんか……。きょう……。体調、悪くって……。だから……。あ、あの……。んっつと、帰り……。一緒に……。ね？ 待って……。て？ いい！」

ぞくぞくする快感が声を上ずらせ、しゃっくりをしているような途切れ途切れな話し方になってしまふ。

「ああ。わかったよ。そんなじゃ俺、登坂壁のところまで待ってるからよ。いつものように元気なっつてから来いよ。いいな」

「んっ……。わか……。つた。じゃ……。ね……。んっ!？」

こんな時は昭利の鈍感さがあるがたい。彼の足音が遠ざかるのを聞くとホッとす。その一方で、マンコをほじくる指がそろそろ二本にならないかと期待する自分がある。

「ほら、行くぞ……。つか、雄太の野郎、どこいきやがったんだ？ 探さないとな」

「うん。そうだね……」

——そいつなら今ここでアタシにエッチなイタズラしてるのに……。

明日香は唇を噛み、必死で快感の声を抑えた……。

「んふう……」

カーテンで覆われたベッド、明日香は投げ出すように足を開いていた。彼女が腰を下ろしている部分はうっすらと染みができており、接着面が糸を引いていた。デニムとパンティは布団の上に無造作に置かれ、揺れる度にずれていく。

「ね、おっぱい見せてよ」

「……ん」

鼻息を荒げる雄太にせがまれ、明日香はパーカーを脱ぐ。

ブラジャー姿になると、早速雄太の手が伸びる。彼が無遠慮に布地を上にならずと、ぷるんと弾みをつけておっぱいがこぼれた。

まだ膨らみかけの明日香のおっぱいは手で触ると少しはみ出す程度の大きさだ。

今日は十分にイタズラしていたせいかな、乳首が立っており、汗ばんでしっとりとしていた。

「はあん……」

締め付けられたままのおっぱいをぐいっと揉まれ、明日香は低く呻く。乳首を弄られ、身体の中がじゅくんと疼き、さらにシーツの染みを広げていた。

その反応が楽しいのか、雄太はにやにや笑いながら執拗にいじり、明日香はそれに煽られて何度も身体をくねらせた。

快感は欲しいけれど、強く与えられるのがこわい。雄太の手で気持ちよくさせられるのが癪だけれど、今日されたイタズラでたまった欲求を満たしたくもある。

「明日香ちゃん、今日は素直だね……」

「うっさいな……。黙ってすればいいでしょ……。スケベ……」

乳首を弄られると気持ちよい。お腹の下あたりで疼く気持ち割れ目から粘液を滴らせる。まるで雄太の指を欲しがり涎を垂らしているようで恥ずかしい。脱いだはずがどんどん身体が熱くなっていた。

「へへ、じゃお言葉に甘えて……」

雄太はにじり寄ると、明日香の割れ目に手を伸ばす。中指と薬指で割れ目をなぞり、クチュクチュと音を立てた。

「んっ……ふう……あんっ……」

割れ目の上の方、小指より小さい程度の膨らみがいじられた時、明日香の身体に強い刺激が走る。

「ちよ、そこ……やだ……」

あまりの痛みに雄太を突き飛ばそうとするが、力が入らずさがるような格好になる。

「んっ……あ……」

割れ目からにじみ出る愛液が雄太の指先を湿らせ、その触れ方をソフトにすると、刺激が緩んで甘さが伝わっていた。

「あはあん……なんで、すごい……キモチイイ……そこ……やばい……って」

「そうなの？　ここがいいんだ……へえ……」

雄太は中指と薬指を割れ目に押し入れ、親指でぶくつとした部分を弄る。親指が肉芽を弄るたびに明日香は甘い声で「あん、あん」と喘ぎ、彼の肩に爪を立てた。

「んう……ああん……そこ、なんかすぐかんじちゃうん……。あつ、いい……あとすこし……んっ……あとちよつと、あとちよつとで……イク、いきそ……う……んっ……」

若干腰が引け始めた明日香を見て雄太は距離を詰めようとにじり寄る。そのせいで中指と薬指がぐっと割れ目に押し込まれた。

「ああん！ くう……！」

割れ目をかきわけ、膣内へと乱暴に侵入した雄太の指。明日香の膣は温かく、でこぼこ複雑な形をした膣壁で雄太の指を迎え入れた。

「くう……だめ……おねがい……いま、う……かさないで……」

わなわなと震えながら明日香は雄太にしがみつく。肩に唇をつけ、消え入るように呟くのがやっとなつた。

「でも明日香ちゃん、イキたいんでしょ？ 明日香ちゃんが気持ちよくなりたいっていうからせつかくしてあげてんのにさあ……そういう言い方ってないじゃん！」

「ひううっ……！」

雄太は中指の第二関節までをぐっと押し込み、膣壁を指の腹で強く押すように撫でた。

「んっあ！ あつ、あうう……んっ」

膣内を指で強めに撫でられた明日香は快感に身を震わせる。

奥の奥まで指を入れられたのは初めての経験。割れ目をなぞられるだけで気持ちよいのに、それ以上の快感に息ができないほどだった。

お腹の下辺りでくすぶる欲求をほぐすようにぐいぐいとかき回され、奥からとめどなくエッチなおつゆが滲みだす。頭の中が真っ白になって何も考えられない。目の前が暗くなって、雄太に抱き着いていた。

雄太の頼りない身体付き。運動が苦手でごよよの太り気味の彼は汗臭さがあり、好みではない。それでもすがりつくのが彼しか居らず、明日香は必死にしがみついた。

「はふう、はう……はう……はっ、はっ……はあん……」

これ以上入らないというところまでねじ込まれた二本の指が、今度はひきだされる。返す指先がしっかりと膣壁を撫でるので、さらに快感を押し付けられてしまう。

「んう……！ くう……くっ……あつ、だめ……いく……い……」

もう少しというところで、指が抜けた。また切なさだけの残る明日香はもじもじとシーツに股間をこすりつけるしかない。

「ねえ、雄太……お願いなの……ねえっば……」

泣きそうな明日香は雄太の耳元で懇願していた。

乱れる明日香を見て雄太はぞくぞくしていた。

普段から強気で昭利を始めとして男と対等に言い合う彼女。昔はただの生意気な女でしかなかった。それが、おっぱいが大きくなり、お尻が大きくなった。その変遷の中、雄太の中でも彼女への欲求が溜まっていた。

頭の中で妄想の明日香を何度もエッチな目に遭わせてきたけれど、実際にできた。

欲求を満たしつつあることと、自分をダニのように毛嫌いしている彼女を好きなように扱い、さらにエッチなことを求めさせている。雄太はそれだけで達してしまいそうだった。

「あ、あせるなよ……」

このまま押し倒してとりあえず勃起チンポを濡れぬれマンコにこすりつければいい。

雄太は自分の次にする行動を頭の中で繰り返し、冷静になろうとする。けれど彼女の体温を感じていると、興奮し過ぎて過呼吸を起こしかけていた。

「……ひひひ……ふう……」

「きゃん」

荒い鼻息をつきつつ、明日香を寝かせ、ズボンを下げようとベルトに手をかける。

「え……おちんち……それは……もう、やだ……エッチはダメよ……」

明日香は両手で彼を遮ろうとする。興奮した雄太はベルトを外すことに手間取っていた。

今の内なら逃げられる。けれど明日香はベッドから降りようとしなかった。

下半身が丸裸で、足ががくがくして力が入らないから。それ以上にきちんと気持ちよくなって気持ちをおさめたい……。

ようやくボタンが外れそうになった時、カツカツと廊下を歩く音がした。

「やば……」

雄太は慌ててズボンを穿きなおすとベッドから降りる。

「ちよつと、雄太……逃げる気……」

「だって、こんなところ見られたらやばいじゃん！」

確かにその通りだが、それでも明日香を置いて逃げるという態度に腹が立った。せめて最期まで一緒にいるべきだろうと言いたかったが、その時には医務室のベランダへのドアから出ていく後ろ姿が見えただけ。

明日香は慌てて布団を被り、寝たふりを始めた……。

※ 続きは製品版でお楽しみください……。

10. 昨日と違う今日

——どういふつもりだろう……。

体育館へ向かう渡り廊下を歩きながら、明日香は今日何度目かの自問自答を繰り返していた。これまでとは違う自分。大人になった自分。そう勘違いできた……。

「おーい、明日香……」

ふと上を見上げると、棟を結ぶ中廊下の窓から昭利が手を振るのが見えた。

「え、あ。おーい、昭利——」

普段聞きなれている昭利の声は体育館の雑音の中でも聞き取れる。

「何か用？」

「別に——」

「なんだよ、用が無いなら呼ぶなー、ひまじーん！」

「なんだとー、ちょっと待ってるよー」

「ふふーんだ！ 2分ね。それ以上待たないんだからー」

と、同時に胸が痛む。

昭利に嘘をついたこと。

「……」

今朝から二の足を踏んでいた昭利がやってくる。

いろいろ話したい気持ちはある。待ち合わせの場所へ行かずに帰ったこと。変な電話をしてしまったこと。好きと言ったことへの返事。けれど、それは彼の腹を探りたいというのが本音。最近のことを少しでも感づかれていないかどうか、それが心配だから。それを知るのが怖くもある。もしかしたら、今日、二人の間の距離を開いたのは自分なのかもしれない。

そう思い至ったとき、明日香は自然と身を隠せる場所を探していた。

「なんだよ、待っててくれたっていいのに……」

しばらくしてやって来た昭利は、がっくり肩を落しながらしゃがみ込む。かなり急いでいたらしく、荒い息を肩でしていた。ところどころ服も埃で汚れており、膝を「いて〜」とぼやきながらさすっていた。

急いだ時に転んだのだろうか？ それほどまでに急いでくれたのは、当然会いたいから……。昭利だって気持ちぶつけてくれているのかもしれない。そこから逃げたのは自分……。

明日香は首を振り、そっと立ち上がると昭利の背後に周り、手で目を隠した。

「だーれだ」

声を低くして他の子のマネをしてみた。

「なんだ。明日香かよ」

昭利だっですぐにわかってくれる。昭利は自分をわかってくれる。

「うふふ……、そんなにあたしに会いたかったんだ」

「そんなんじゃないよ」

わかりやすい強がりも可愛らしい。汗だくになるぐらい急いで走って来てくれて……。

「ただ、朝、保健室行ったから心配して……また体調不良かと思ってさ」

……………。

「そう、心配してくれて、なんだ……。昭利、は面倒見、良いからね。ありがと……」

保健室へ行った？ 朝に？ つまり……。もしかして、まさか……。

「おい……。俺汗かいてるから、あんまり引っ付くなよ」

「ええ？ いいじゃん、別に……」

照れているだけだろうか？ それとも？

「ふふ、汗くさく」

触ってみたら昭利の気持ちがわかるだろうか？ 知っていたら、嫉妬する？ それとも？

「明日香……」

背中におぶさると、いつの間にか自分より大きくなっていたのに気づいた。

汗で湿っているけど、大きくなり始めて、筋肉もつき始めてがっしりしてきている。まだ頼りなさが残るけど。

「で、なんの用？」

「だから、ちょっと心配になって……。それで話がしたくて」

「そっか……。ふーん。もしかして電話で言ったこと、真に受けちゃったとか？」

「え……」

真っ赤になるうぶな反応。

「あんなの冗談だよ。ちょっとからかったら真っ赤になって、カワイイ」

ほっとする。

「なんだよ、俺、本気で心配したんだぞ」

嬉しい。

「だって、一緒に帰れなくてすねてるかな？ って思ってたね？ だから、ちょっと元気づけて

あげようかなって思ってたよって好きって言ったの」

確認。

「へ、そんなのバレバレだったの。わかってたし、嘘だって」

……………よかった。

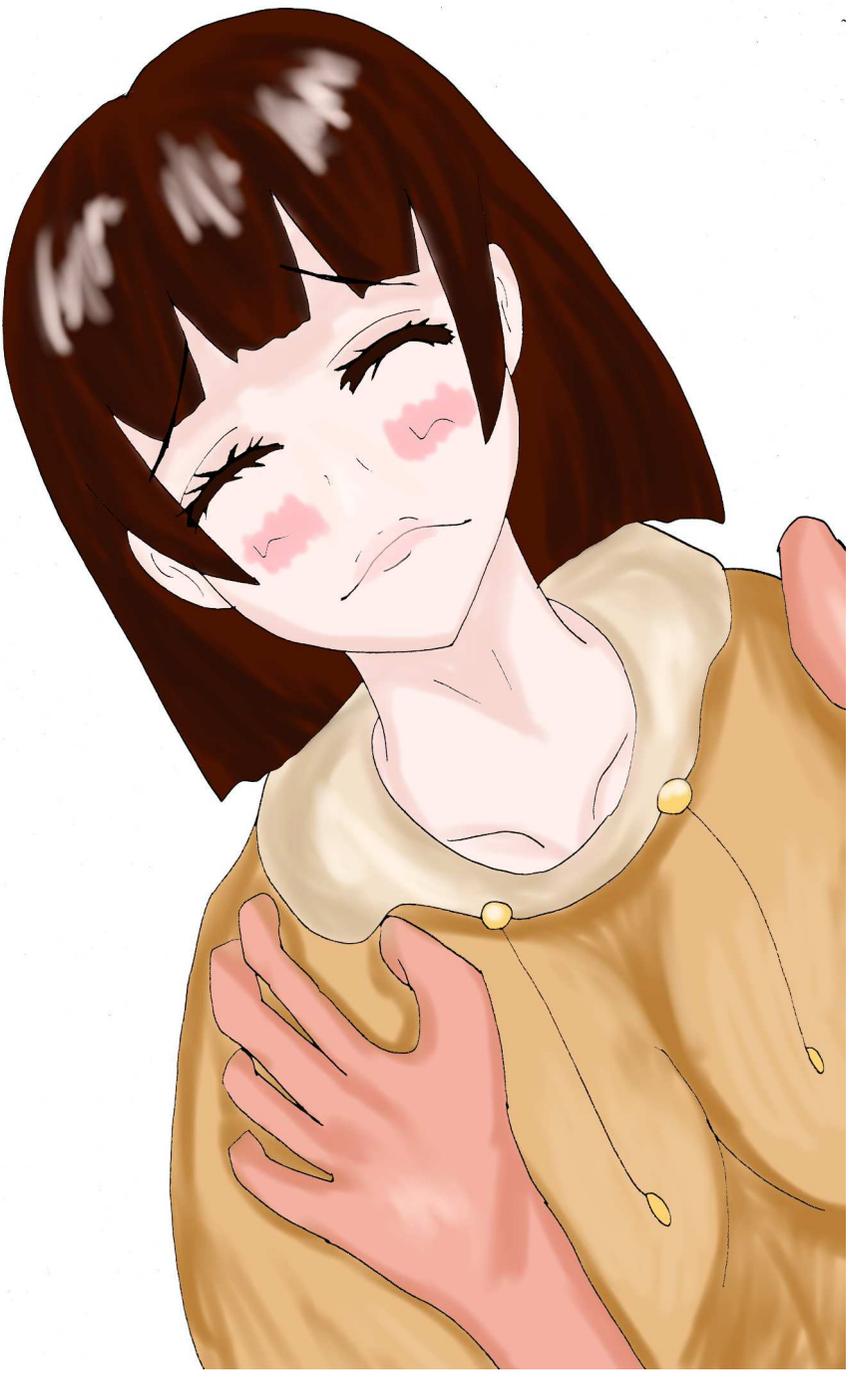
「昭利さあ、あたしのこと、好き？」

昭利が好き。

「それは……。またからかう気かよ……」

「どっちだと思おう？」

好き。



「……冗談だろ、どうせ。だって、あっちにもこっちにも誰かいるのに、そんなこと本気で言えるわけないじゃん」

でもまだ初心な男。

「誰か居たら、言えないと思う？」

「……怒るぞ」

まだまだなんだ。

「うふふ……ごめんね」

ごめんなさい。

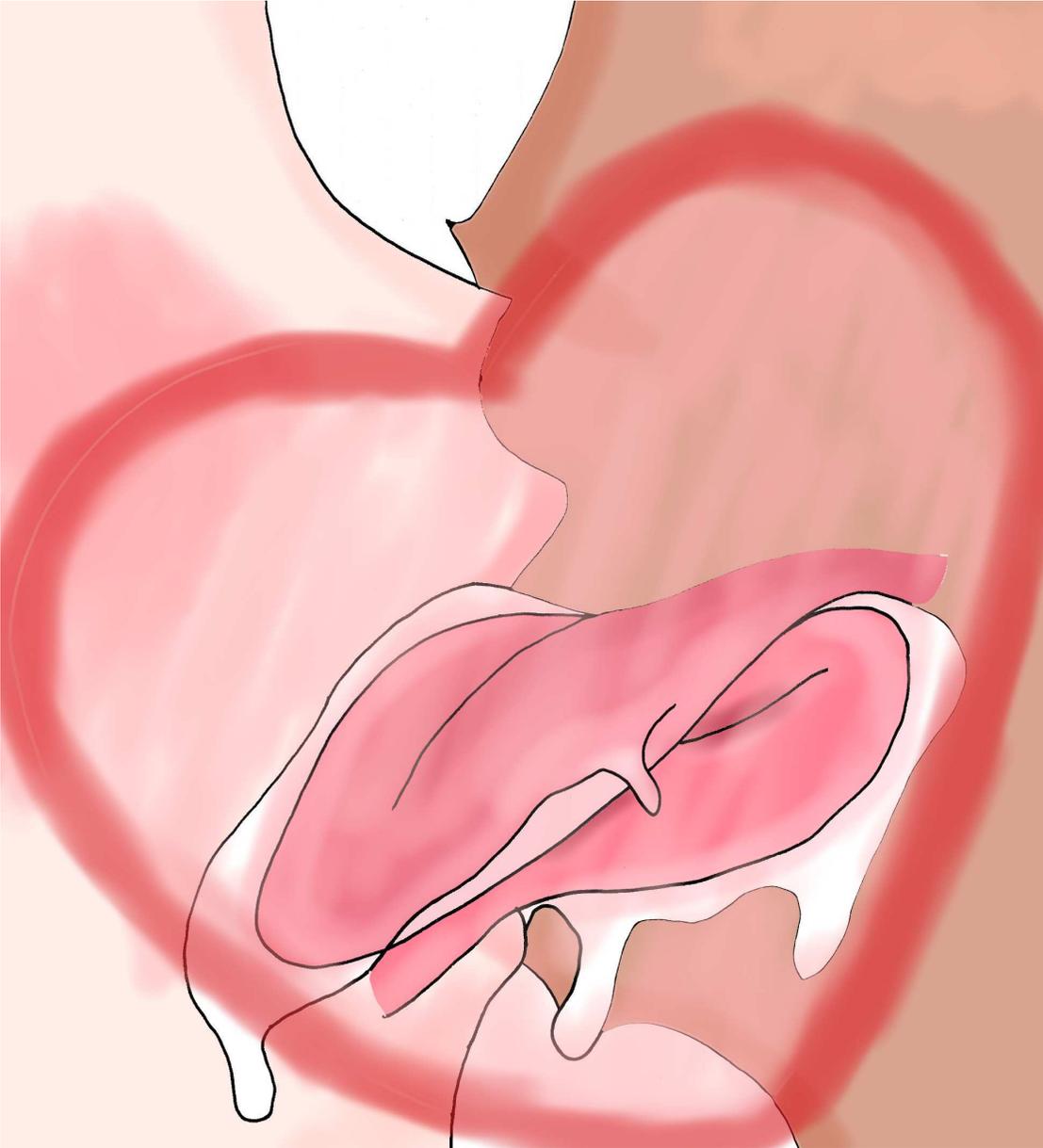
「けっ、なんでこう女はうそばっかしくんだよ。俺は心配したのに損したよ」

「そっか。じゃあさ、お詫びにキスしてあげよっか？」

「からかうなよ……」

振り向く昭利の驚いた顔。目を瞑り、彼を待つ。

彼からしてくれたら、今日の事は、昨日のことだって………忘れられる？



「……へえ……」

廊下に行くのはまた御崎澄子。じろじろ見ないでほしい。きっと彼女はまだキスしたことがないんだろう。

「んふ……ふう……んもう……昭利ったら……」

真っ赤な昭利。

可愛い。

「だって、急にそんな……」

よく見ると涙が出ていた。

「んもう、涙するぐらい嬉しかった？」

よね？

「違うっての、目が乾いただけだって……」

強がり。

「どうだか？ 初めてのキスが明日香ちゃんとできてうれしかったくないちゃうってことじゃないの？」

唇を拭わないのなら、そう思いたい。

「違うっての！ つか、見られたぞ……」

また、か。

「うそ。御崎さんに……かあ……。まあ、大丈夫よ。彼女、あんまりそういう噂話とかしないし……っていうか、昭利のことなんて眼中にないんじゃない？」

「うっせーな」

「っていうか、御崎さんって、吉川君と付き合ってるっていうし、キスぐらい珍しくないんじゃない？」

「……そうなの？」

「わかんないよ？ 見たわけじゃないし……。さてと、じゃあ掃除に戻ろうかしらね。早くしないと明日になっちゃう」

「それなら俺、手伝うよ。そしたらすぐだろ」

「うん、ありがと……。あ、でもお、さっき澄子さんに見られちゃったもんね……。なんか恥ずかしいし、今日はいいよ」

「そうか……うん」

「ありがと。いつもいつも昭利あきとしらって頼るのも悪いしね」

立ち尽くす昭利から逃げるように背を向けた。

咲き急ぐ蕾 後編 体験版

※ 続きは製品版でお楽しみください……。